

## The Car Which I Loved

### (1) CORONA SF

—コロナウイルス制圧を願うものの  
こころない日本語表現を機に—

吉田英生 (S53/1978卒)



みなさまからの積極的なご投稿をお願いする方式で、このコーナーを新設いたしました。あくまでも最近のクルマの宣伝ではなく、できるだけ古い（前世紀に作られた）クルマにつき

①機械屋らしく本来のメカニズムや機能の点から論じていただくとか

②人生との関わり（思い出）からでも話題にしていただけたら

という趣旨です。英文タイトルは007の“The Spy Who Loved Me”を意識したものです。

このような連載を思い立ったのは他でもなく、世界中が新型コロナウイルス感染症（Coronavirus disease 2019、COVID-19）について、日本人のわるい癖から省略形<sup>2</sup>で「コロナ」あるいは「新型コロナ」を繰り返し、「コロナ」をこころなくも悪者として呼んでいることによります。編集人が30～40代のころ「CORONA SF」とともに人生を過ごした数々の思い出のある立場からは、いたたまれませんでしたので、つい新コラム設置となった次第です。なお、編集人はクルマのメカニズムには疎いので、以下は主に前記②の方から書かせていただきます。

編集人のCORONA SF（使用期間：1992-2001）は、1957年の初代から数えて10代目の5ドア版。CORONA（PREMIO）は11代目を最後に2001年になくなりましたが、LEXUSの前身であるCELSIORが登場するまで、COROLLA、CORONA、CROWN—いずれも“C”で始まる3車種—がトヨタの中心的ラインナップで、人生を歩んで？「いつかはクラウン」（1983）という有名なキャッチフレーズがありました。従来型セダンの延長としての5ドア車では、3代目CORONAが日本で最初（1965：VWゴルフより早い）、かつこの10代目SFで最後（1996）と思います。

<sup>2</sup> 編集人が京大に着任後、耳慣れず驚いた言葉の一つは「近ツリ（近畿日本ツーリストの略）」でした。また、桂キャンパスに移転してから頻繁に繰り返される言葉「Bクラ（事務組織が集中するBクラスターの略；「クラスター」は残念にも最近有名な語になってしまいました）」に抵抗があります。関連して、村上陽一郎氏が『あらためて教養とは、新潮文庫（2009）p.34』に、以下のように書いておられて、「パソコン」なる語は編集人自身使ってはおりましたものの、共感するところがありました：

もっとも、知識人の言語と一般の言語という二重性は、方言の問題を除いても、今日でもみられますね。フランスでは、知識人が使うフランス語が純正のフランス語であるという考え方が支配しています。アカデミー・フランセーズという一つの国立機関が、その純正なフランス語を守っているわけでしょう。綴り一つでもこう書いてはいけない、ああ書くべきだと取り決めますし、この外来語は使ってはいけないとも定められます。たとえば英語の「コンピュータ」という言葉をフランス語としては使ってはいけないんですよね。日本語の場合とはえらい違いです。「コンピュータ」は「オルディナテュール」<ordinateur>と言います。ましてや「パーソナル・コンピュータ」を日本式に略して「パソコン」などとは断じて言わない（巻末の戯れ文にも書きましたが、私は、外来語までこうした略語にするのがどうしても耐えられない性分なのです）。



珍しくワックスをかけた直後に雨が降って美しい撥水現象が見られました（2000年8月撮影）。

写真のように今見てもテールにかけて流れるような美しいフォルム（セダンの方はそれほどでもなく、同時期のCROWNを一回り小さくしたようなずんぐりしたフォルムでしたが）で、5ナンバーボディにもかかわらず車内・後部スペースは広く実用性も抜群でした。ラジエーターグリルも控えめで、大きなラジエーター（グリル）が必要な燃料電池車はともかく、最近はやりのサメというかアンコウの口のような噛みつかれそうな大仰なもの比べると、気品があると思います。

CORONA SFとの思い出は限りなくあります。二人の娘たちが小学生だった夏休みには全国を走りまくって、ハイウェイカード50000円券（額面58000円）を使い切ったことがありました。最もひどい渋滞は、2000年のお盆（家内に静止されたのを聞かず）淡路花博に行こうと名神高速道路の京都南から淡路をめざしたときでした。わが道は、映画「十戒」で紅海が二つに割れて開けるような思い上がりで突入したものの、案の定、本線に入った途端に全く動かず、茨木出口まで24キロに4時間半を要して断念—名神高速道路を降りて高槻のマクドナルドで失地回復すべくハッピーセットを食べたこともありました。また、サザンオールスターズのCD（とりわけ「希望の轍」）をかけるとテンションが上がってアクセルを踏み込んでしまい、気づいたら後ろで赤いランプがぐるぐる回っていること立て続けに3回、ポイントがたまって免停のご褒美までいただきました。長年家族を乗せていろんな苦楽を共にしたクルマは、家と同様にかげがえのない空間でしたが、年をとってもう少しソフトな乗り心地のクルマに乗りたくなってクラウンエステート（クラウン最後のワゴンにして最後の直列6気筒）にバトンタッチしました。「いつかはクラウン」は、CORONA SFとの出会いから9年後のことでした。